

伊方町(旧)における閉校になった小中学校の校歌について

The school song of the closed primary and secondary schools of Ikata, Ehime

教育学部音楽講座：市川克明

序 ～ 研究に至る経緯

愛媛大学地域創成年報第11号で、松山市沖の興居島の閉校になった2つの小学校、および休校中の分校の校歌についての調査を発表した¹。近年、全国的に、とりわけ大都市圏以外の人口減少地域では、多くの小中学校が統廃合されている。今回取り上げる愛媛県西宇和郡伊方町においても第2次大戦後20の小中学校²、および11の中学校³が閉校している。

伊方町の場合には、後で述べるとおり1955年の「昭和の大合併」により3町が合併したこと、またその地域特有の地理的条件により⁴、旧瀬戸町、旧三崎町内では1970年代から1990年代半ばまで多くの学校が統廃合された経緯がある。2005年の「平成の大合併」の後、小学校では統廃合がさらに進み、2019年に予定されている水ヶ浦小学校の閉校により一段落する。

前回の興居島に関する論文でも述べたが、その一つひとつの学校には長い歴史があり、幾多の卒業生がおり、児童生徒たちに歌われた校歌が存在した。閉校とともにそれらの歌は公式には二度と歌われることはなくなり、やがて忘却の彼方に消えてゆく運命にある。今それを記録に残すことは、確かにそこに存在した学校とそ

の校歌の「痕跡」を残すという意味で極めて重要である。なぜなら、校歌にはその時代時代の要求や、児童生徒、地域住民の子どもらへの思い、教育に対する期待が込められているからである。

当初、現在の伊方町域内すべての閉校になった公立学校を取り上げる予定であった。しかし、1955年の旧西宇和郡の3町が統合し、またそれぞれの地域の小中学校には複雑な統合の歴史が存在するため、すべてを一度に取り上げることは不可能であるとの結論に達した。したがって、本論では、旧西宇和郡伊方町域内にかつて存在した小・中学校⁵、統合の際、校歌が変更になった小・中学校⁶、および、2019年に統合が予定されている小学校1校⁷、合計7校を対象とする。

1. 西宇和郡伊方町について

現在の西宇和郡伊方町は、2005年の「平成の大合併」により旧伊方町、旧瀬戸町、旧三崎町の西宇和郡3町が合併することにより成立した⁸。地理的には、「岬十三里」と称される通り、日本で最も細長い半島と言われ、東西約40kmに及ぶ佐多岬半島の付け根からその最先端の佐多岬にいたる地域に位置する。また、狭い箇所

¹ 市川克明、「興居島(松山市)における閉校になった小学校の校歌について」、愛媛大学地域創成研究年報第11号、愛媛大学地域創成研究センター 2016

² うち1校は瀬戸町立田部小学校高茂分校(1961年閉校)である。

³ うち3校は瀬戸町立四ツ浜中学校の川之浜分校、田部分校、神崎分校(いずれも1949年四ツ浜中学校に統合)である。

⁴ 「1. 西宇和郡伊方町」を参照

⁵ 有寿来小学校(2001年閉校)、豊之浦小学校(2009年閉校)、二見小学校(2015年閉校)、町見中学校(1994年閉校)

⁶ 九町小学校(2015年二見小学校と統合)、伊方中学校(1994年町見中学校と統合)

⁷ 水ヶ浦小学校

⁸ 「続伊方町誌」、伊方町 2005, pp. 53-78, 「伊方町・瀬戸町合併協議会だより」、伊方町・瀬戸町合併協議会 2002, 「キ・ラ・リ 伊方町・瀬戸町・三崎町合併協議会だより」、伊方町・瀬戸町・三崎町合併協議会 2003-2005

では幅は1 kmにも満たず、リアス式海岸、また海岸線近くから急峻な山地が迫っており、平地がほとんどないという特徴を有し、集落の多くは階段状の平らな面やわずかな平地に点在している⁹。鉄道は通っておらず、道路の整備は遅れ、1959年、ようやく半島先端部に位置する三崎まで公共バスが開通した¹⁰。それまでは、小さな港伝いの船舶が交通の中心であり¹¹、いわゆる陸の孤島のような状況であった。

従来、産業はみかんを中心とする柑橘類の栽培や漁業であった。また、日本屈指の古い伝統である杜氏集団もよく知られていた¹²。戦前は国内はもとより、満州、朝鮮にまで足をのぼすなど¹³、農家の苦しい家計のやりくりのための酒造出稼ぎも広く行われ¹⁴、みかんに肩を並べるほどの産業であった¹⁵。

しかし、人口減とともに第一次産業従事者は減り続け、1965年に2537名であったが、2000年には787名と激減している¹⁶。一方、旧伊方町内では1973年に伊方原子力発電所1号機建設が着工、1977年より運転を開始し、その後も1982年に2号機、1994年に3号機が稼働、伊方町にとっての重要な税収源となった¹⁷。また、建設時、定期点検時などでの特需など同原子力発電所による町政および町民の暮らしへの影響は非

常に大きく¹⁸、特に、建設業などの第二次産業、宿泊施設、サービス業などの第三次産業に関しては、建設あるいは点検などの際には大きく従事者を増やしている¹⁹。

しかし、旧伊方町、旧瀬戸町、旧三崎町とも1955年の成立以降も一貫して人口は減り続け、旧3町地域合計の人口は、1970年に2万人あまりであったものが、2005年の合併時には1万2千人、現在では1万人を割り込んでいる²⁰。特に年少人口²¹は2010年に1066名であったものが、2020年には678名、2030年には491名と半減以下になることが予想されている²²。すなわち、現在の5つの小学校と3つの中学校、1つの高等学校²³の体制が維持できるか否か、予断を許さない状況は今後も続いていくと思われる。

2. 伊方町内の小中学校の統廃合について

現在の伊方町内の小学校は、伊方小、水ヶ浦小、九町小（以上旧伊方町）、三机小、大久小（以上旧瀬戸町）、三崎小（旧三崎町）の6校である。うち、水ヶ浦小学校は2019年に閉校し、伊方小学校への統合が予定されている²⁴。

小学校の閉校の理由は、著しい人口の減少によるものである。当然、人口減少は伊方町に限っ

⁹ 「ひめぎん情報 2014年秋号 No.277」, 株式会社愛媛銀行ひめぎん情報センター 2014, p. 1

¹⁰ 「伊方町誌」, 伊方町誌改訂編集委員会編 1968, p. 403

¹¹ 「伊方町誌」(1968), p. 412-415

¹² 「伊方杜氏」, 伊方町地域振興センター 1992, p. ii

¹³ 「伊方杜氏」, p. ii, pp. 474-475

¹⁴ 「伊方杜氏」, p. 447

¹⁵ 「伊方杜氏」, p. 462

¹⁶ 張貞旭, 「伊方町における原発立地と地域経済・地方財政」, 財政と公共政策 第28巻第1号(通巻第39号), 財政学研究会 2006, p. 58

¹⁷ 「伊方町誌」, 伊方町誌改訂編集委員会編 1987, pp. 23-38

¹⁸ 張, pp. 56-59

¹⁹ 張, p. 58

²⁰ 2016年12月21日の住民基本台帳人口は9917人。

²¹ 0歳~14歳。

²² 「伊方町人口ビジョン」, 伊方町 2016, p. 2

²³ 愛媛県立三崎高等学校, 在籍生徒数117名。(2017年1月5日現在)

²⁴ 水ヶ浦小学校の2017年月14日現在の児童在籍数は20名。

たことではなく、愛媛県全体(-3.19%²⁵)はもとより日本全国(-0.7%²⁶)の問題であることはいうまでもない。しかし、伊方町では全国、あるいは全県の減少率をはるかに超える水準で推移している。

2015年の国勢調査によると、伊方町は前回2010年の調査と比較した人口減少率は愛媛県内で久万高原町(-12.28%)に続き2番目に高い(-11.51%)²⁷。伊方町全体では、2005年から2015年までの10年間で、世帯数は505(-9.5%)減少した²⁸。とりわけ、九町小学校校区(-13.2%)と三机小学校校区(-21.7%)での減少が著しい²⁹。18歳未満のいる世帯数は、この10年間で伊方町全体のすべての地域で激減しているが、水ヶ浦小学校校区(-58.2%)、三崎小学校校区で(-45.5%)、三机小学校校区(-44.1%)が特に著しく、町全体では38.9%の減少となっている³⁰。八幡浜市に隣接し伊方町内の中心地である伊方小学校校区では、町内の他地域と比較し減少率は低いとはいえ、27.8%の減少である³¹。

3. 旧伊方町内の学校史概観

旧伊方町では伊方小学校、九町小学校、水ヶ浦小学校の3校が存続し、他の旧2町に比べると閉校になった小中学校は少ない。有寿来小学

校、豊之浦小学校、二見小学校、および町見中学校である。

旧瀬戸町、旧三崎町域内を含め、この地域の小学校の歴史はいずれも非常に古く、そのほとんどが明治初期に設立された小学校、あるいは分教場に由来する。これは地勢上交通の便が悪いこの半島の特徴でもあると言える。この章では、明治期から戦時期までの旧伊方町内の教育史を外観し、後半で新制小中学校について述べる。

《旧伊方村・旧町見村の成立》

1889年12月、旧伊方浦の11の地区(大浜、中之浜、仁田之浜、河内、湊浦、小中浦、中浦、川永田、豊之浦、伊方越、亀浦)により³²、伊方村が、1890年3月に旧九町浦、二見浦の13地区(奥、奥峰、下向、畑、須賀、久保、西、二見本浦、加周、田ノ浦、古屋敷、大成、島津)により町見村成立した³³。明治初期に、大浜、湊浦、二見、加周地区などに小学校が開校した³⁴。

《旧伊方村の小中学校》

伊方小学校は1874年に法通寺に設置認可された群魚小学校を起源とするが³⁵、後述する校歌ではこの「群魚」が歌詞に現れる。1883年当時には、8つの分校(大浜、中之浜、仁田之浜、河内、川永田、伊方越^{いかたごし}、亀浦、豊之浦)を有し、

²⁵ 2010年から2015年まで、平成27年国勢調査地方集計速報-愛媛県-, p. 1

²⁶ 2010年から2015年まで、平成27年国勢調査人口速報集計結果, p. 1

²⁷ 国勢調査地方集計速報-愛媛県-, p. 2

²⁸ 「伊方町人口ビジョン」, p. 17

²⁹ 「伊方町人口ビジョン」, p. 17

³⁰ 「伊方町人口ビジョン」, p. 17

³¹ 「伊方町人口ビジョン」, p. 17

³² 「伊方町誌」(1968), p. 79

³³ 「伊方町誌」(1968), p. 79

³⁴ 「伊方町誌」(1968), p. 80, pp. 282-286

³⁵ 「伊方町誌」(1987), p. 948

1887年、第1次小学校令により「伊方尋常小学校」と改称された³⁶。

大浜分校は1882年に群魚小学校第一分校と称し、のちに龍王校、ついで小学校簡易科大浜校改称した³⁷。これは現在の水ヶ浦小学校である。1886年、亀浦分校に伊方越分校は、統合され群魚第三分校となった³⁸。この伊方越分校、亀浦分校が有寿来小学校の起源である³⁹。群魚小学校第二分校であった川永田分校は、1887年、伊方尋常小学校豊之浦分校となった。すなわち、豊之浦小学校の起源である。

1890年、小学校令により⁴⁰、大浜簡易小学校、川永田簡易小学校、有寿来簡易小学校、豊之浦簡易小学校が成立した⁴¹。さらに、第2次小学校令により、1892年には、すでに成立していた伊方尋常小学校に加え、大浜、有寿来、豊之浦の各尋常小学校が設立された⁴²。さらに、1895年には伊方尋常高等小学校が創立されたが、同学校の校歌は「南豫案内」に掲載されている⁴³。このように明治時代後半から大正、昭和初期まで、伊方村には尋常高等小学校1校、尋常小学校3校が存在した。

1933年に有寿来、大浜尋常小学校が、1938年に豊之浦尋常小学校が伊方尋常高等小学校に統合され、それぞれの尋常小学校は分教場となった⁴⁴。1941年国民学校令により、伊方国民学校

と改称し、それぞれ同国民学校の分校となった⁴⁵。

第2次世界大戦後、1947年、学制改革により伊方国民学校は村立伊方小学校と改称し、有寿来、大浜、豊之浦はそれぞれ村立の独立校となった⁴⁶。同年、伊方、有寿来、豊之浦、大浜の各小学校校区を校区とする伊方村立伊方中学校が開校した。

その後、伊方小学校は児童数は増加し、1951年には児童数780名であった⁴⁷。そのため、小学校校区であった中之浜地区を大浜地区と合わせ校区とし、1952年、大浜小学校は水ヶ浦小学校と改称された⁴⁸。

《旧町見村の小中学校》

旧町見村域内には明治初期より一貫して2つの小学校が存在した。1877年、九町地区には工町小学校が、二見地区には嘉周小学校が創立された。その後、1887年には九町簡易小学校、翌年には二見簡易小学校が設立、1892年、九町尋常小学校、二見尋常小学校となった。1901年には町見高等小学校が、1908年に九町高等尋常小学校、次いで1924年、二見高等尋常小学校が創立した。1941年、その3校とも国民学校となった。第2次大戦後、1947年に町見村立九町小学校、二見小学校となり再出発した。同年、この

³⁶ 「伊方町誌」(1987), p. 948

³⁷ 「伊方町誌」(1987), p. 952

³⁸ 「伊方町誌」(1987), p. 955

³⁹ 当時、小学校があった場所は山林で通称「有寿来」と称されていた。(田中発氏への電話インタビューに拠る, 2017.3.8)

⁴⁰ 小学校簡易科、いわゆる簡易小学校は、貧困家庭の就学率を高めるため、1886年の小学校令で定められた。授業料不要(経費は区町村費から徴収)、3年制で、読書、算術、作文、習字の4教科のみの小学校。しかし、就学率は上がらず、逆に向学心を挫折させるとのことで、1890年、第2次小学校令において早くも廃止された。

⁴¹ 「伊方町誌」(1987), p. 948, p. 955, p. 958

⁴² 「伊方町誌」(1987), p. 948, p. 955, p. 958

⁴³ 小林葭江, 「南豫案内」, 南豫案内事務所 1910, p. 176

⁴⁴ 「伊方町誌」(1987), p. 949, p. 958, 5年生以上は本校に通学。

⁴⁵ 「伊方町誌」(1987), p. 949, p. 958

⁴⁶ 「伊方町誌」(1987), p. 949, p. 952, p. 955, p. 958

⁴⁷ 「戦後・西宇和教育史」(以下西宇和教育史), 「戦後・西宇和教育史」編集委員会 1992, p. 144

⁴⁸ 「伊方町誌」(1987), p. 942

2つの小学校校区を校区とする町見中学校が開校した⁴⁹。

《旧伊方町の小中学校》

1955年、西宇和郡伊方村と町見村は合併し、伊方町立小学校6校、すなわち伊方、水ヶ浦、有寿来、豊之浦小学校（以上旧伊方村）、九町、二見（以上旧町見村）の各小学校が、町立中学は旧村地域にそれぞれ1校ずつ、すなわち伊方中学校、町見中学校が存在した。

伊方、町見の両中学校の生徒数は、1962年に頂点を迎え、その後は漸減を続けた⁵⁰。ピーク時には、伊方中学校15学級715名、町見中学校11学級476名であったものが、1995年には伊方中学校195名（対1962年比 -27.3%）、町見中学校68名（対1962年比 -14.3%）と激減した。同様に、1970年代から小学校児童数も減少に転じ、ついに、1980年代中頃には中学小学校とも規模適正化について議論が行われることになった⁵¹。

その結果、1998年には、伊方、町見の両中学校が統合することになった。様々な論議の上、両校とも閉校し、新たに「伊方町立伊方中学校」を開校させることになり、校章、校訓、校歌ともすべて新しく制定した⁵²。

小学校では、2001年に有寿来小学校が⁵³、2009年に豊之浦小学校が伊方小学校に統合⁵⁴、2015年に二見小学校は九町小学校に統合⁵⁵、さらに2019年4月には水ヶ浦小学校も伊方小学校に統合される予定である⁵⁶。結果として、将来的

には旧伊方村地域と旧町見村地域にそれぞれ1校ずつ小学校が残ることになった。

4. 閉校・廃止になった小中学校の校歌

はじめに、旧伊方町域の閉校になった小学校3校（有寿来、豊之浦、二見）、閉校予定の小学校1校（水ヶ浦）の校歌について詳述する。このうち、有寿来小学校は新旧2種の校歌が存在する。また、九町小学校は二見小学校との統合に伴い、校歌が新たに制定された。そのため閉校してはいないが旧校歌を対象としここに含める。さらに、伊方中学校は町見中学校との統合の際、対等合併となり一旦閉校し新たに新制伊方中学校として創立した。それに伴い新校歌が制定されたため、同様にここで取り上げる。

《有寿来小学校新校歌》

学制改革直後に定められた旧校歌が長らく歌われていたが、1982年3月、新校歌が制定された⁵⁷。作詞は、1980年度から1981年度まで有寿来小学校校長であった岡野^{ひとし}一氏⁵⁸によるもので、氏は制定の月に離任している。また、作曲は岡野氏の前任者で、1977年度から1979年度まで同校校長を務めた阿部淳敬氏⁵⁹で、新旧校長が作詞作曲に当たるといふ珍しい例である。岡野氏は新校歌作成にあたり、当時松山市在住であった旧校歌の作詞者、兵頭多十郎氏に新校歌制定の伺いを立て了承された⁶⁰。

⁴⁹ 「伊方町誌」(1987), p. 969

⁵⁰ 「伊方町誌」(1987), p. 559

⁵¹ 「伊方町誌」(1987), p. 559

⁵² 「続伊方町誌」, pp. 559-568

⁵³ 「続伊方町誌」, pp. 568-574

⁵⁴ 「生涯学習だより『ふれあいいかた』2009年5月号」, 伊方町教育委員会 2009, p. 2

⁵⁵ 「生涯学習だより『ふれあいいかた』2015年5月号」, 伊方町教育委員会 2015, p. 1

⁵⁶ 「平成26年度 伊方町の教育に関する事務の点検・評価報告書」, 伊方町教育委員会 2015, p. 12

⁵⁷ 有寿来小学校跡の記念碑による。なお、記念碑、「伊方町誌」(1987), p. 956 ともに「改訂」としている。

⁵⁸ 「愛媛県人名大辞典」, 愛媛新聞社 1987, p. 207, 岡野一（おかのひとし）, 八幡浜市立松蔭小学校校長（出版当時）, 1925年保内町生まれ,

⁵⁹ 2017年3月13日現在, 松山市在住で94歳である。

⁶⁰ 田中発氏（2017.3.8）, 阿部淳敬氏（2017.3.13）への電話インタビューに拠る。

岡野氏は、1947年度愛媛師範学校本科男子部を卒業、同年度より保内町立宮内中学校で、以降、同町立川之石中学校、同宮内小学校、同喜須来小学校、伊方町立豊之浦小学校などで教鞭をとり、1980年度から1981年度まで有寿来小学校で、その後は、伊方小学校で校長を務めた⁶¹。また、阿部氏は1944年度愛媛師範学校本科第一部を卒業⁶²、保内町立宮内中学校、三瓶町立東中学校、伊方町立伊方中ほかで音楽専科教諭として在職⁶³、1977年度から1979年度まで有寿来小学校校長を務めた⁶⁴。有寿来小学校以外では、校長として在職した旧三崎町立串小学校ほか、旧瀬戸町立大久小学校、旧保内町立川之石小学校などの校歌を作曲した。

新校歌は、学校から「眼下に眺め」られる、「瀬戸のしおざい海の青」や、南西方向に「日々に仰ぐことのできる「大峰」など景色や自然を取り上げている。第3節では、明治初期の群魚小学校の伊方越分校、亀浦分校を起源とする有寿来小学校は、「古き歴史」と「うるわしき亀伊（亀浦・伊方越）の心亨けつぎ」⁶⁵、「次代に伝え」よう、と歌っている。

付点リズム、順次進行と時折現れる分散和音と跳躍進行により、躍動感あふれる曲調である。G-Dur で、最低音は第3音である h音、最高音は属音である d²音で、跳躍進行時の音域は広いが、歌いやすい旋律構造になっている。

《有寿来小学校旧校歌》

有寿来小学校旧校歌は、学制改革により同小学校が成立した直後、1947年6月に制定された⁶⁵。作詞は、新制有寿来小学校初代校長として赴任した兵頭多十郎氏である⁶⁶。氏は、前年まで喜須来村立喜須来国民学校⁶⁷の教頭を務めていた⁶⁸。兵頭氏は、有寿来小学校で1947年度から1957年度まで、その後、1962年度まで伊方中学校⁶⁹、1963年度は九町小学校と校長職を歴任した⁷⁰。有寿来小学校新校歌の作曲者で、現在、松山市在住の阿部淳敬氏によれば、新制有寿来小学校校長着任した兵頭氏は、学校にも校歌があるのがよいと考え校歌作成を思いつき、当時国内でよく知られていた「満蒙開拓団の歌」の旋律に合わせて作詞したとのことである⁷¹。校歌としては珍しく f-Moll の楽曲で⁷²、公式には作曲者不詳とされている⁷³。

第1節は「仲良く楽しく学ぼうよ」、と児童の天真爛漫な様子を歌いと戦後の新制学校の成立を喜んでいるのに対し、第2節では、「やがて祖国の役に立つ」、第3節は、「昭和の少年」の「勤めは重く」、「どんな苦難も乗り切つて」、「文化日本の建設」を「やるぞどこまで根かぎり」と、国家の財となるべき国民になることをめざしている。戦後の祖国復興に向けて人々を鼓舞するような内容となっている。

第2節の歌詞では、新校歌にも取り上げられている亀浦、伊方越両地域について触れている。

61 「愛媛県人名大辞典」, p. 207

62 「愛媛県教育関係職員録」(以下「職員録」) 昭和41年度, 愛媛県中小校長会 1966

63 「職員録」 昭和33~44年度, 愛媛県中小校長会 1958-1969

64 「職員録」 昭和52~54年度, 愛媛県中小校長会 1977-1979

65 有寿来小学校跡の記念碑による。

66 1985年, 伊方町町制施行30周年記念事業で, 教育功労者として表彰を受ける。(「伊方町誌」(1987), p. 50)

67 喜須来村は, 1955年, 川之石町, 磯津村, 宮内村と合併し西宇和郡保内町となった。

68 愛媛県学事関係職員録 昭和21年度, 愛媛県教員組合 1947-1948

69 「伊方町誌」(1987), p. 968

70 「伊方町誌」(1987), p. 962

71 阿部淳敬氏への電話インタビューに拠る。(2017.3.13)

72 「伊方町誌」(1968), p. 302では g-Moll であるが, この採譜は誤りがあるため採用せず, 「わがふるさと有寿来」(有寿来小学校創立百五周年誌)の版を採用。

73 「伊方町誌」(1987), p. 956

「亀伊を結ぶ有寿来校」は、「二つ部落の中にたち」と長い歴史を暗示している。

旋律は第8小節目まで、各小節の第1拍目が常に逆付点、第2拍目は付点で第6小節目までは第4音と第7音(導音)を欠き、全曲を通じ導音は一度も現れない。分散和音、跳躍進行も多く、日本音階的で「軍歌調」に感じる⁷⁴。

1982年に新校歌が制定されたが、その理由は公式には不明である。上記のような内容が時代にそぐわなくなったこと、歌詞の中に「部落」というような表現があること、小学校の校歌にはふさわしくないとされる短調が用いられていることなどが推測できる。

《豊之浦小学校》

豊之浦小学校校歌は、1961年10月に制定された。翌年には校旗も制定され、いずれも学校のシンボルとなった。

作詞は豊之浦在住であった上田清春氏で、当時PTA会長を務めており、その関係で作詞を依頼されたものと考えられる⁷⁵。作曲は当時八幡浜教育事務所社会教育主事であった松田寿雄氏で⁷⁶、氏は内子町立御祓小学校校歌も作曲している⁷⁷。

詞は、小学校の様子、そこから見た風景を表しており、高台にあり階段を上って投稿する児童の姿を表している。また、松の緑、宇和海の青さとともに育つ、子供たちへの希望を詞にしている。制定当時、すなわち戦後15年が過ぎ、戦後復興を遂げ、日本は平和国家として世界との強いつながりをめざしていた。1959年、ミュンヘンでの国際オリンピック総会で、次々回

のオリンピックが東京で開催されることが決まった。まさにその直後に作られたこの校歌は、「世界の友と手をとって平和の歌を歌おうよ」と結んでいる。

曲は、A-B-A'の三部形式で、両端部は4分の4拍子で流れるような順次進行が多く、中間部は4分の2拍子で付点リズムが特徴的である。

《二見小学校》

1955年の町村合併により町見村が閉村、その翌年に二見小学校は校歌、校章を制定した⁷⁸。

作詞は友岡敬氏である⁷⁹。友岡氏は、二見小で1955年度から助教諭として、1957年度から1960年度まで教諭として勤務した。その後、伊方小で1年、1961年度から1965年度まで九町小で社会の教諭として在職している⁸⁰。

作曲は、愛媛大学助教授の清家加寿恵氏である。氏は伊方町内では旧伊方中学校、町見中学校の校歌の作曲を始め、県内の数多くの小中学校の校歌を作曲している⁸¹。

明治初期に嘉周小学校とし小島の庵に創設し⁸²、1891年、亀ヶ池を埋め立て新校舎が完成した⁸³。そのため、校章は亀の甲、さらに鶴亀はとこしえに栄えるの意から鶴をあしらい、二見の文字を図案化している。校歌は、「深みいるここ亀ヶ池」と始まり、第2節は「潮さいの山にこだまし幸多き自然のめぐみ」と、海辺にあり裏手はすぐ山となる場所に位置する小学校の様子を表している。くしくも、校歌の制定された1956年は、日本が国際連合に加盟し、経済企画庁の経済白書には、「もはや戦後ではない」と記された年である。経済的にも、1955年に一

⁷⁴ 有寿来小学校出身の田中発氏によると、「小学6年生の時に制定されたが、当時は軍歌調とは感じなかった。しかし、大人になって聞くと確かに軍歌のようだな。」と思ったとのこと。(電話インタビューに拠る、2017.3.8)

⁷⁵ 上田清春氏ご遺族への電話インタビューに拠る。(2017.3.14)

⁷⁶ 「伊方町誌」(1968), pp. 321-322, 少なくとも1958年3月から1962年2月までは同職にあった。

⁷⁷ 1966年制定, 2014年閉校。

⁷⁸ 閉校記念誌「学ぶよろこび生きるしあわせ」, 伊方町立二見小学校・二見小学校統合準備委員会 2015, p. 13, 有寿来小学校旧校歌はさらに早く, 1947年制定。

⁷⁹ 昭和28年早稲田大学中退との記述が「愛媛県教育関係職員録」にあり。

⁸⁰ 「職員録」, 昭和35~40年度, 愛媛県中小校長会 1960-1965

⁸¹ 市川, pp. 5-6

⁸² 「伊方町誌」(1987), p. 963

⁸³ 「創立百周年記念誌 ふたみ」, 二見小学校創立百周年記念誌編集委員会 1977

人当たりの国民総生産は戦前の水準を超え、高度成長の始まりとなった「神武景気」の幕開けの年である。「新しき世界つくらん」、「栄えあれ」など、このような時代をよく表した歌詞である。

曲は4分の2拍子から始まり、5小節目からは4分の4拍子、途中再度4分の2拍子の部分を挟み、4分の4拍子と、拍子が何度も変わるのがこの校歌の特徴である。また分散和音の旋律も多く、曲に躍動感を与えている。

《水ヶ浦小学校》

1952年、校区が変更となり伊方村立大浜小学校が閉校、伊方村立水ヶ浦小学校が設立された。それ以後もしばらくは大浜小学校校歌を歌っていたが⁸⁴、1967年、水ヶ浦小学校校歌が制定された。作詞はPTAとあり教職員と保護者により作られた。作曲者の朝雲暁美氏は、1959年度愛媛大学教育学部を卒業後⁸⁵、水ヶ浦小学校に1962年度から1966年度まで音楽の教諭として在職した⁸⁶。また、声楽を専門とし合唱分野において多大な功績を残した⁸⁷。

校歌では地域のシンボルでもある「龍王山」の朝日から始まり、第3節の冒頭は、はるか西方に見える「佐田の岬の夕映え」、と美し景色を歌っている。また、「海見る丘」、「花咲く丘」、「栄える丘」と、海岸線近くの高台にある見晴らしがよく、美しい自然の中で過ごす子供たちの様子が目に浮かぶようである。

曲は順次進行が多く非常に歌いやすい。最後の4小節は二部に分かれているのも特徴である。

《九町小学校旧校歌》

九町小学校は二見小学校と統合した際に、対等合併ということで校歌を新たに定めた。次に、その際廃止された旧校歌「九町っ子」を取り上げる。

作詞作曲とも、当時九町小学校の音楽教諭であった辻弘氏⁸⁸によるもので、世界に羽ばたく子どもになって欲しいとの願いを込めて作ったとのことである⁸⁹。辻氏は1946年度旧制大分工業高等学校を卒業⁹⁰、1964年度から1972年度まで九町小学校に在職した⁹¹。最初の年は算数を担当、翌年からは音楽を担当していた⁹²。なお、辻氏はその後、1976年度から1980年度までは九町小学校の教頭として、1985年度から1987年度まで水ヶ浦小学校に校長として在職した。

1969年1月、体育館が新築落成し、それを記念し校歌が制定された。校歌には「九町っ子」というタイトルがつけられ、地域の自然や小学校の様子などは描かれず、むしろ「世界のみんな」へ思いを馳せている。1961年制定の豊之浦小学校校歌の「世界の友と手をとって」、あるいは1962年制定の伊方小学校の校歌の「世界の友と手をつなぎ」など、東京オリンピック、大阪での万国博覧会と高度成長期に我が国が世界の国々との関係を強烈に意識した時代であったことを表している。

⁸⁴ NHK「校歌の旅」2016年5月18日放送、NHK松山放送局 2016

⁸⁵ 「職員録」昭和37年度、愛媛県中小校長会 1962

⁸⁶ 「職員録」昭和37～41年度、愛媛県中小校長会 1962-1966

⁸⁷ 阿部淳敬氏への電話インタビューに拠る。(2017.3.13)

⁸⁸ 愛媛県人名大辞典, p. 544, 辻弘(つじひろむ), 水ヶ浦小学校校長(出版当時), 1929年伊方町生まれ, 1995年, 伊方町町制施行40周年記念事業で, 教育功労者として表彰を受ける(「伊方町誌」(1987), p. 51)。

⁸⁹ NHK「校歌の旅」2013年5月25日放送、NHK松山放送局 2013

⁹⁰ 「職員録」昭和40年度、愛媛県中小校長会 1965

⁹¹ 「職員録」昭和39～47年度、愛媛県中小校長会 1964-1972

⁹² 「職員録」昭和39～47年度、愛媛県中小校長会 1964-1972

曲は、一貫して二部合唱になっている。順次進行が多く、また、各声部は3度で重ねられることが多く歌いやすい。

《町見中学校》

町見中学校は1998年に伊方中学校と合併し閉校となった。町見中学校校歌は1956年2月8日に制定された⁹³。

作詞は当時校長であった井上生太郎氏⁹⁴、作曲は清家加寿恵氏である。作詞の井上氏は、新制三机中学校校長として1947年度から1948年度⁹⁵、1954年度から1956年度は町見中学校の校長として在職した⁹⁶。氏は、1940年度に日本大学を卒業しており、中学では主として社会と英語を担当した⁹⁷。

この校歌の楽譜は、町見郷土館に保存されており、また保存状態もよく今回の調査では唯一実際に使用されていた楽譜が残っていた例である⁹⁸。その意味において極めて貴重な資料と言える。

歌詞は文語体で、「久遠の誠」、「至善の道」、「垂乳根しのぶ」、「緇林^{しりん}」など、現在の中学生にとり比較的難解な語句を使用している。第1節冒頭は「宇和の海原」、「磯の香」など地域の自然を、また「自由の旗」、第2節の「正義の旗」など、同時期に制定された二見小学校校歌同様、当時の社会情勢を反映している。第3節の「緇林」とは木々が生い茂ってい

て暗い林を意味するが、学問を教える場所あるいは行動を指す「緇林杏壇⁹⁹」を念頭においている可能性もある。

「はつらつ」と記された冒頭、4分の2拍子で始まる前奏の後、付点リズムと分散和音を特徴とする躍動的な旋律が始まる。中間部は、「のびやかに」と記され、4分の4拍子で流れるような旋律、また、伴奏は主旋律を重ねず変化を与えている。後半は、再び4分の2拍子で始まり、4分の4拍子、4分の2拍子となんども拍子を変え、最後は4分の4拍子で閉じる。歌詞に合わせて拍子を変え、曲調を変化させ、また、最後は、Moll-Durで閉じるなど、この時代の校歌としては非常に手が込んでいる。

旧町見村は、明治期に九町浦、二見浦の両地区が合併して成立したが¹⁰⁰、その名称でもわかる通り（各地域から一文字ずつを組み合わせてできた。）、地域ごとの愛着心は他に増して強いものがあつたと推測される。特にこの地域に限ったことではないが、市町村あるいは学校などの統合において、その名称をどうするかということは、難しい問題を含んでいる。例えば、1955年の昭和の大合併¹⁰¹、2005年の平成の大合併において伊方町では大きな問題となった¹⁰²。この旧町見村地域の九町、二見両地区でも、歴史的に様々な問題が存在したようである。

⁹³ 伊方町立町見中学校校歌記念碑

⁹⁴ 1954～1957年度町見中学校校長

⁹⁵ 愛媛県学事関係職員録 昭和22～23年度、愛媛県教員組合 1947-1948

⁹⁶ 「職員録」 昭和29～31年度、愛媛県中小校長会 1954-1956

⁹⁷ 「職員録」 昭和29年度、愛媛県中小校長会 1954, p. 101

⁹⁸ 町見郷土館：愛媛県西宇和郡伊方町二見甲813-1、旧町見中学校校舎を利用した伊方町唯一の博物館施設。

⁹⁹ 孔子は木々の生い茂った薄暗い林で遊んで、杏の木の下の壇で休んだという故事。

¹⁰⁰ 「伊方町誌」(1968), p. 110

¹⁰¹ 「伊方町誌」(1968), pp. 150-151

¹⁰² 「キ・ラ・リ 伊方町・瀬戸町・三崎町合併協議会だより」第16号、伊方町・瀬戸町・三崎町合併協議会 2004、「住民小委員会で選考された第3次選定作品の7作品が第11回合併協議会で報告され、第13回合併協議会で3月末まで継続協議することとしておりましたが、協議による決定は困難となり、投票により決定いたしました。投票は、委員51名による無記名投票で行われました。【投票の結果:「伊方」28票、「佐田岬」22票、「西宇和」1票】」

町見中学校が創立した1947年、初代校長として赴任した井櫻政勇氏は¹⁰³、町見中学校の閉校記念誌に、学校の設置場所に関して、「初代校長として物申す」以下のような一文を寄稿している¹⁰⁴。

場所は、誰がみても昔の銅山跡が経済的にも、景観的にも最良である、九町側に公私混同を平気にやってのける横紙破りの有力議員が、二見側に取られては大変と猛反対をしているので、私は政争の渦中に巻き込まれるのを恐れ、当時、人事権を持っていた労働組合に計ったら、原案に理解を示して頂き、私は八幡浜教育事務所へ。

町見中学校は、別人を校長に任命して、もめにもめた事件は無事解決した。

どこの地域にも、その地への愛着があり、当然それは学校などでも同様である。この町見中学校の例は、その一つの事例に過ぎないが、九町、二見両小学校の統合、また、後述の伊方、町見両中学校の統合でも、おそらく同様の住民感情はあったに違いない。しかし、それを乗り越え将来を担う子どもたちにとってのよりよい教育のあり方を住民それぞれが真剣に向き合うことにより、統合への合意が実現したのである。

《旧伊方中学校》

対等合併した伊方中学校と町見中学校であるが、その際に、伊方中学校は閉校し、新たに新伊方中学校が創立された。その際に、旧伊方中学校校歌は廃止されている。ここでは、1998年まで存在した旧校歌を取り上げる。

旧伊方中学校校歌制定に関しては、第4回卒業生で、1992年8月より1995年9月まで伊方町教育長を務められた田中発氏¹⁰⁵の同校閉校記念誌への寄稿文にその詳細が明かされてる¹⁰⁶。以下はその引用である。

校歌作詞者・福島勇先生を偲んで

第四回卒業生
田中 発

学校教育制度が六・三・三・四制に改められたその翌年の昭和二十三年（一九四八年）に、私は伊方中学校の新入生年になった。（同級生百八十名、四クラス編成であった。）ところが校歌がなかった。不思議だった。

「先生、中学校には校歌、ないのですか。」と自分の学級担任の先生に聞いた。

「そうよ、ないんだよ。」と先生の答え。

「小学校にはありましたよ、ぼくらの…。」

「うん、そうか。」

「……」

「……」との会話。

二年生になった時、校歌を作るようになったので、生徒も応募するようにとの伝達があった。後で聞いた話だが、実際何人かの生徒が応募したとのことであった。

九月、二学期になって校歌の発表があった。作詞者を聞いて、「えーっ」と驚いた。なんと私共の学級担任の先生ではないか。クラス仲間一同（四十五～六名）は、互いに誇りに感じて大いにはしゃいで、先生を讃えた。

作詞者の福島勇先生は、三瓶町下泊のご出身で昭和二十三年四月三島中学校（現在三瓶中に統合）から伊方中学校へ赴任され、私の一年と二年の時の学担任で国語の先生であった。

私は、クラスの世話等もさせて頂く立場にもあったので、先生とは緊密な師弟間だった。

校歌は、その制定会議（または制定審査委員会？）において、厳正な審査の結果、私共の先生の作品が採択されたとのことであった。生徒の応募も何点かあったけれど、選外だったとのこと、とても先生の頭脳には、かなわないなあと思つた。

当時の音楽の先生で、現在松山市に在住の山内良子先生によると、福島先生は国語の優秀な先生でであったそう。作曲は愛媛大学の清家教授¹⁰⁷に依頼したとのこと。校歌が制定されるや、短期間のうちに全校生徒に、

¹⁰³ 1956年度から1957年度は二見小学校校長、1963年10月1日より1968年まで伊方町教育長、1985年、伊方町町制施行30周年記念事業で、教育功労者として表彰を受ける。（「伊方町誌」（1987）、p. 50）

¹⁰⁴ 町見中学校閉校記念誌「母校の思い出」、伊方町立町見中学校閉校記念誌編集委員会 1998、p. 23

¹⁰⁵ 「伊方町誌」（1987）、p. 92、2005年、伊方町町制施行50周年記念事業で、教育功労者として表彰を受ける（「伊方町誌」（1987）、p. 52）。2017年3月8日、電話によるインタビューを実施。

¹⁰⁶ 閉校記念誌「愛郷」伊方町立伊方中学校閉校記念誌準備委員会 1998、p. 26

¹⁰⁷ 助教授が正しい。

早くマスターさせるために、その指導は、なかなか大変であったと回顧談をされていた。

私は徒歩通学一時間の道程中、よく友達と歌いながら登下校したものである。

福島勇先生は、私が二学年終了の時、四津浜中学校(現在瀬戸中に統合)の教頭に栄進された。

以下略

戦後間もない1947年、学制改革により伊方中学校が開校した。小学校ではあった校歌が伊方中にはなく、田中氏たちは中学でも校歌が欲しい、と思ったのであろう。なお、氏は有寿来小学校出身で、新学制により国民学校が同小学校となり、1947年、兵頭多十郎氏により校歌が作られ、当時小学6年生であった田中氏はこの校歌を歌ったと述べている¹⁰⁸。氏によれば、「二年生になった時」とあるので、1949年に校歌を制定することになった。9月に採用となった詞がが発表になり、その後、清家嘉恵氏に作曲を依頼したとのことである¹⁰⁹。生徒たちが新しい校歌を喜び歌ったことが田中氏の寄稿文から見て取れる。

詞は明るく希望に満ちた、新生日本を象徴する内容で、未来ある少年少女への強いメッセージとなっている。第3節の後半は、「海の向うの友」を呼び、「かたく世界の国々をむすぶつばさをはぐくもう」、と伊方から世界へ目を向けている。同様の歌詞を持つ、伊方小学校、豊之浦小学校、九町小学校旧校歌、の一つのモデルになったとも考えられる。

田中発氏の寄稿文にも登場する作詞者の福島勇氏は、伊方中学校に1948年度から1949年度に在職¹¹⁰、翌年度からは四ツ浜中学校に赴任し国語と社会を担当している¹¹¹。

この校歌は、地域の自然ではなく、子供たちへの期待を歌詞にし、戦後間もない新制中学に

通う生徒が「明るい日本をきづく」力を持ち、「かたく世界の国々をむすぶつばさ」を育てて欲しいと願っている。D-Dur で、明るく元気な曲調を持ち、前半から中間部は、流れるような順次進行が多く、最後で付点リズムにより躍動感を醸し出している。

《伊方尋常高等小学校》

本稿は、旧伊方町内の戦後の小中学校を対象としているが、次に、明治時代後期に存在した「伊方尋常高等小学校」校歌を取り上げる。小林葭江著の「南豫案内」第3小第1節「歌唄」の中に歌詞のみ収録されている¹¹²。ここにその全文を記載する。

伊方尋常高等小學校歌

伊方尋常高等小學校作歌

| | |
|--|---|
| むらのなをいかた 村名負う伊方にて ころろさほ 一つ心に棹さして まなうみひろとも 学びの海は廣く共 すじおほきみ 唯一筋に大君の ときなみかぜあらとも 時に波風荒くとも せい たま そのかみ 征し給ひし其上を からだ つよ せうぢき 身体を強く正直に ひと つく きまり 人に盡して極よく | がくどうだん むす 學童團を結びつゝ まなぶ うみ ぎざい 學の海に漕ぎ出ん こぎ ゆ さき とをとも 漕行く先は遠く共 なごとも 詔の儘に進むべし やはた かみ かん 八幡の神の三韓を おも おこ なん その 思ひ起さば何の其 つと はげ しんせつ 勉め勵みて親切を けふ ちだんなく 今も今も ¹¹³ と油斷無 |
|--|---|

伊方尋常高等小学校は1895年創立、「南豫案内」は1910年出版であるため、その間に制定されたと推測できる。「大君」、「詔」「八幡の神の三韓を征し給ひし」など、当時の社会状況を感じさせる文言もあり興味深い。また、「学びの海」は広く、「漕行く先は」遠くても、「大君」の詔のままに進むなど、明治期の教育への考え方が伝わってくる。波風が荒くても、神功

¹⁰⁸ 田中発氏への電話インタビューに拠る。(2017.3.8)

¹⁰⁹ 清家氏は、伊方町内では町見中学校、二見小学校の校歌を作曲しているが、愛媛県内の非常に多くの小中学校校歌の作曲を手掛けている。

¹¹⁰ 「愛媛縣學事關係職員録」昭和23年度、愛媛縣教員組合 1948, p. 4, 「職員録」昭和24年度、愛媛縣中小校長会 1949

¹¹¹ 「職員録」昭和25年度、愛媛縣中小校長会 1950

¹¹² 「南豫案内」, p. 176

¹¹³ 二の字点で記載

皇后¹¹⁴による三韓征伐（八幡の神の三韓を征し）を思えば、どうということもない、と述べている。最後は、身体を強くし正直に勉学に励み他に尽くし親切に、と教育勅語にも通ずる歌詞を持っている¹¹⁵。残念ながら、どのような旋律であったのかは今回は確認できなかった。

5. 終わりに

序でも述べた通り、伊方町における閉校になった小中学校の校歌の調査は困難を極めた。まずは、その数の多さ、それに歴史の長さである。明治、昭和、平成と3度にわたる大合併と、国策による教育制度の変化により学校の歴史が非常に複雑であった。

また、伊方町誌には校歌の旋律は収録されているものの、伴奏は主に教員の伝承による楽譜に頼らざるを得ず、その多くは今回見つけることはできなかった。町見中学校の校歌は奇跡的に町見郷土館に保存されておりその楽譜を写譜した。また、幸いにも伊方中学校校歌は、録音が残っておりそれをもとに採譜した。今回伴奏譜が見つからなかった学校この校歌については、寄稿者自身によりピアノ伴奏パートを編曲することにした。これにより、歌われなくなった校歌がいつの日か何かの記念日に再び蘇ることを期待したい。

今回の収集・研究は、多くの関係者の方に助力なくしては不可能であった。町内の歴史を研究展示している町見郷土館の高嶋賢二氏、伊方町立伊方小学校の中井雄治校長先生、同町立水ヶ浦小学校の岩本数明教頭先生、そして、研究のきっかけとなった伊方町小中学校の音楽の先生方、特に伊方町立伊方中学校の三好あかね先生、伊方小学校の坂本美恵子先生には楽譜収集に当たって尽力いただいた。とりわけ、旧伊方中学校閉校記念誌の中で、校歌制定時の貴重な記録を残された元伊方町教育長の田中発氏、また、有寿来小学校校歌の作曲者でもあり、旧校歌制

定時の経緯を語っていただいた阿部淳敬氏にも深く感謝の意を表したい。両氏とは、今回電話で直接お話しを伺うことができ、非常に貴重な証言となった。

昨年の興居島の閉校になった小学校の校歌を取り上げた際にも感じたが、小学校は単にその地域の教育機関というだけではなく、地域住民たちの心の拠りどころであり、活動の中心であった。その校歌が歌われなくなり忘却の彼方に消え去っていく。今回、楽譜を収集するのに非常に苦労が伴った。旋律のみしか伝承されていない校歌がほとんどで、伴奏パートを寄稿者自身が編曲したり、録音をもとに採譜したりということを行った。また、旋律すら残されていない校歌もあった¹¹⁶。さらに、校歌の作詞者、作曲者の多くはすでに鬼籍に入り、その制定に至る経緯、あるいは作る際に意図したことなどは全く伝わっていない。完全に忘れ去られる前の現在、このように「形」として残していくことは今に生きる私たちの使命である。

2017年3月

参考文献：

- 1) 市川克明、「興居島(松山市)における閉校になった小学校の校歌について」、愛媛大学地域創成研究年報第11号、愛媛大学地域創成研究センター 2016
- 2) 平成28年度伊方町教育要覧、伊方町教育委員会 2015
- 3) 新伊方町十年のあゆみ、伊方町政策推進課 2015
- 4) 「続伊方町誌」、伊方町誌改訂編集委員会編 2005
- 5) 「戦後・西宇和教育史」、「戦後・西宇和教育史」編集委員会 1992
- 6) 「伊方町誌」、伊方町誌改訂編集委員会編 1987
- 7) 「伊方町誌」、伊方町誌改訂編集委員会編 1968
- 8) 「愛媛県教育関係職員録 昭和24年度～昭和55年度」、愛媛県中小校長会 1949-1980
- 9) 「愛媛県学事関係職員録 昭和23年度」、愛媛県教員組合 1948
- 10) 「紀元二五九二年 町見郷土誌」、町見村役場 1932
- 11) 「明治四十五年 町見村郷土誌」、町見村役場 1912

¹¹⁴ 第15代応神天皇の母とされる。日本書紀などよれば3世紀に政務を取り仕切った。

¹¹⁵ 「博愛衆ニ及ホシ」、「学ヲ修メ業ヲ習ヒ」

¹¹⁶ 水ヶ浦小学校の前身である伊方村立大浜小学校校歌は、2017年3月の時点では発見できなかった。

閉校記念誌

- 1) 閉校記念誌「学ぶよろこび生きるしあわせ」, 伊方町立二見小学校・二見小学校統合準備委員会 2015
- 2) 閉校記念誌「豊小の絆永遠に」, 伊方町立豊之浦小学校, 豊之浦小学校統合委員会 2009
- 3) 閉校記念誌「有寿来のこころ永遠に」, 伊方町立有寿来小学校, 閉校記念事業実行委員会 2001
- 4) 閉校記念誌「愛郷」伊方町立伊方中学校閉校記念誌準備委員会 1998
- 5) 町見中学校閉校記念誌「母校の思い出」, 伊方町立町見中学校閉校記念誌編集委員会 1998

記念誌

- 1) 創立120周年記念誌「ふるさと群魚」, 伊方町立伊方小学校 1994
- 2) 「わがふるさと有寿来」, 有寿来小学校創立百五周年, 独立四十周年記念誌編集委員会 1988
- 3) 創立百周年記念誌「ふたみ」, 二見小学校創立百周年記念誌編集委員会 1977

統計ほか

愛媛県伊方町町勢要覧, <http://www.town.ikata.ehime.jp>

※本稿では、西暦表記を基本とし、書籍のタイトルなど必要に応じ年号を併記した。

楽 譜 資 料

有寿来小学校校歌

作詞：岡野 一
作曲：阿部 淳敬
編曲：市川 克明

せ と の し お ざ い う み の あ お
が ん か に な が め て う つ く し き あ か る さ も た ん
と も み な と い そ し む わ れ ら う す き の こ

伴奏パート：寄稿者による編曲

| | |
|---|---------------------------------|
| 1. 瀬戸のしおざい 眼下に眺めて 明るさ待たん いそしむわれら | 海の青 美しさ 友みなど 有寿来の子 |
| 2. 堂々山と 日々に仰ぎて 正しさ待たん きたえるわれら | 大峰を たくましさ 友みなど 有寿来の子 |
| 3. 古き歴史と 亀伊の心 時代に伝えん つとむるわれら | うるわしき 享けつぎて 友みなど 有寿来の子 |

有寿来小学校旧校歌

作詞：兵頭 多十郎
作曲：不詳
編曲：市川 克明

せとないかいにのぞみたる ぼくらのまなぶ うすきこう
くうきはきれいでながめよく まなぶによいとこよいがーこう
なかよーくーたのしいーく まなぼーうーよ

伴奏パート：寄稿者による編曲

| | |
|--|---|
| 1. 瀬戸内海に ぼくらの学ぶ 空気はきれいで 学ぶによいとこ 仲よく楽しく | のぞ みたる 有 ^{うす} 来校 眺めよく よい学校 学ぼうよ |
| 2. 亀伊を結ぶ 二つの部落の 心を清める 力の限り やがて祖国の | 有寿来校 中にたち 別天地 学ぶなら 役にたつ |
| 3. 昭和の少年 務めは重く どんな苦難も 文化日本の やるぞどこまで | ぼくたちの 道遠し のり切って 建設だ 根かざり |

豊之浦小学校校歌

作詞：上田 清春
作曲：松田 寿雄
編曲：市川 克明

こ だ かい お か に た っ て い る ぼ く ら の
が っ こ う と よ の う ら あ さ か ぜ う け て さ わ や か
な ま ー つ の み ど り が よ ん で い る う ー よ く い き よ と よ ん で い
る そ う だ う み の こ ぼ く た ち だ あ め に も か ぜ に も
ま け な い で つ ー よ い か ら だ を き た え よ う

伴奏パート：寄稿者による編曲

| | |
|---|---|
| 1. 小高い丘に ぼくらの学校 朝風受けて 松のみどりが 強く生きよと そうだ海の子 雨にも風にも 強いからだを | たっている 豊之浦 さわやかな 呼んでいる 呼んでいる ぼくたちだ 負けないで きたえよう |
| 2. のぼる石段 わたしの学校 ひるの光に 海の青さが 正しくのびよと そうだいっしょに 苦しい時には 学ぶ心を | ふみしめて 豊之浦 かがやいて 呼びかける 呼びかける のびるのだ 励ましあって つらぬこう |
| 3. 父と母とが みんなの学校 はてなく広い またたく星が 仲よく育てと そうだみんなと 世界の友と 平和の歌を | みつめてる 豊之浦 大ぞらに 語ってる 語ってる かたくんで 手をとって 歌おうよ |

二見小学校校歌

作曲：友岡 敬
 作詞：清家 嘉寿恵
 編曲：市川 克明

ふ か み いる こ こ か め が い け ま な び や に わ れ
 ら つ ど い て し の お し え こ こ ろ に き ぎ み た く ま
 し き か ら だ を き た え あ た - ら し - き せ か い つ
 く ら ん さ か え あ れ さ か え あ れ あ あ ふ た み こ う

伴奏パート：寄稿者による編曲

1. 深みいるここ亀ヶ池
 学びやにわれらつどいて
 師の教え心にきぎみ
 たくましき体をきたえ
 新しき世界つくらん
 栄えあれ栄えあれ
 ああ 二見校

2. 潮さいの山にこだまし
 幸多き自然のめぐみ
 ここにありわれら学ぶよ
 美しき心をみがき
 もろともに誠きわめん
 栄えあれ栄えあれ
 ああ 二見校

水ヶ浦小学校校歌

作詞：水ヶ浦小PTA
 作曲：朝雲 暁美

りゅう お う ざ ん の あ さ ひ を あ お ぎ ま な
 び の に わ を ふ み - し め て
 と も と て を と り さ あ い こ う ぼ く ら の ほ こ る ま な び や は う
 み ゐ る お か の み ず が う ら

伴奏パート：水ヶ浦小学校提供

1. 龍王山の 朝日をおおぎ
 学びのにわを ふみしめて
 友と手を取り さあいこう
 ぼくらの誇る まなびや
 海見る丘の 学舎は
 水ヶ浦

2. 水清らかな この里の
 すぐれた伝統 うけついで
 新しい道 さあ進もう
 わたしの誇る まなびや
 花咲く丘の 学舎は
 水ヶ浦

3. 佐田の岬の 夕映えに
 あすへの希望 燃やしつつ
 強く正しく さあおびよう
 みんなの誇る まなびや
 栄える丘の 学舎は
 水ヶ浦

九町小学校校歌

九町っ子

作詞：辻 弘

作曲：辻 弘

編曲：市川 克明

♩=100 いきいきと

た か い そら を み あ げ よ う ひろ い ひろ い
 ひろ い ひろ い す み き っ た せ か い の み ん な を む す ぶ そ
 ら おお くちよこののぞみ に じ に かけ よ う

伴奏パート：寄稿者による編曲

第1～2節：上声

第3節：下声

- | | |
|----------|----------|
| 1. 高い空を | 見上げよう |
| 広い広い | すみきった |
| 世界のみんなを | むすぶ空 |
| おお | 九町っ子の望み |
| | 虹にかけよう |
| 2. 赤い土を | たがやそう |
| 深い深い | ゆるぎない |
| 世界のみんなに | つづく土 |
| おお | 九町っ子のほげみ |
| | 花に咲かそう |
| 3. 強いうでを | くみあおう |
| わかるわかる | あたたかさ |
| 世界のみんなと | つながうで |
| おお | 九町っ子の心 |
| | 玉にみがこう |

伊方中学校校歌

作詞：福島 勇

作曲：清家 嘉寿恵

採譜：市川 克明

すこやか なたか ながい ちから あり たくましく
 の こころ を つち に う え よ う よ
 お ー き ー ひ の あ ぎ に ゆ う べ ー に き よ い い
 か た の あ い の め を つ よ く お お き く そ ー
 だ て よ う

伴奏パート：寄稿者による採譜

- | | |
|----------|-------|
| 1. すこやかな | 愛郷の |
| 肩くみ合つて | うえようよ |
| 心を土に | 朝に夕に |
| 大き日の | 愛の芽を |
| 清い伊方の | そだてよう |
| 強く大きく | |
| 2. 伸び伸びと | 青空の |
| 手をさしのべて | まねこうよ |
| 彼方の希望 | 朝に夕に |
| 大き日の | 日本を |
| 明るい今日の | つちかおう |
| きづく力を | |
| 3. ほがらかに | 声高く |
| ほほをならべて | 友よぼよ |
| 海の向うの | 朝に夕に |
| 大き日の | 国々を |
| かたく世界の | はぐくもう |
| むすぶつばさを | |

町見中学校校歌

作詞：井上 生太郎
清家 嘉寿恵

Allegretto はつらつと

mf agitato *mf*

うわのうなばら うしおうつ いそのか ーたかきまなびやに

mp のびやかに *agitato*

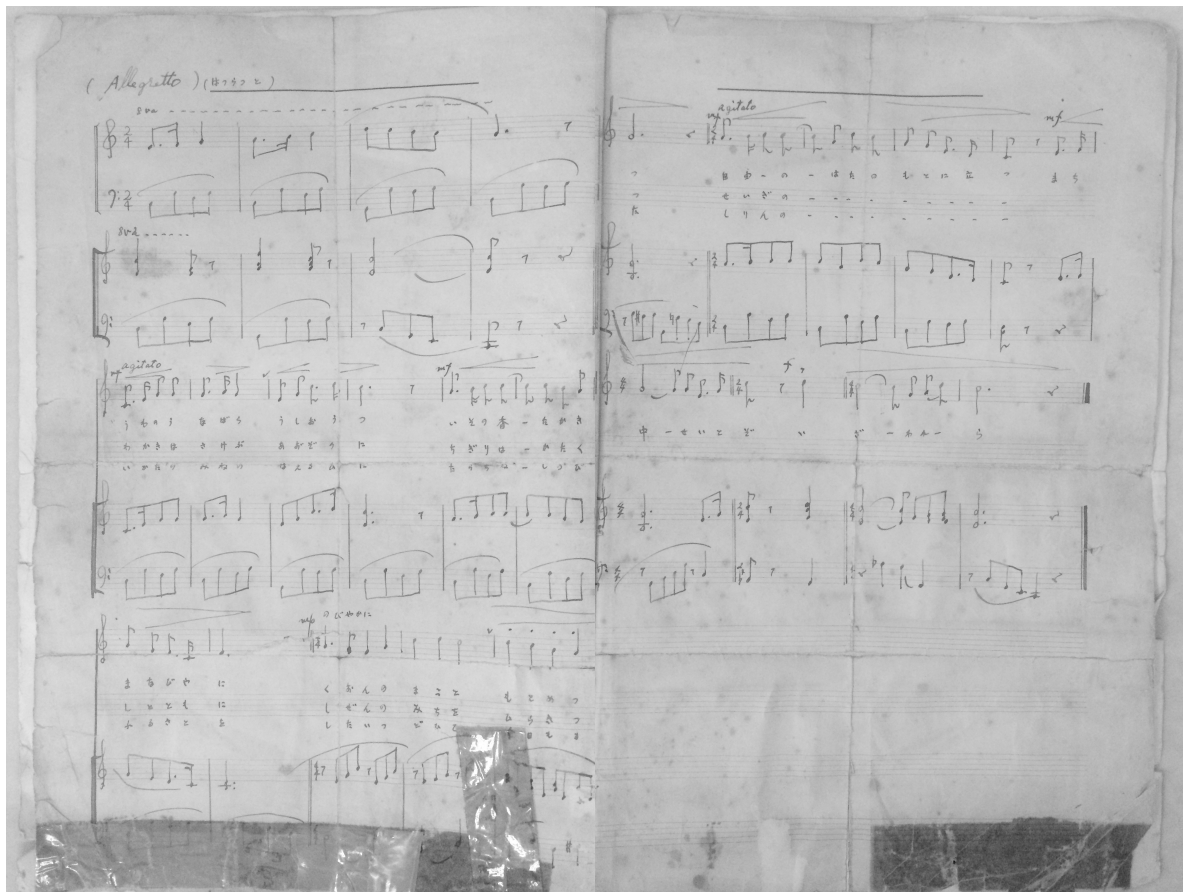
くおんのまこと もとめつ つ じゆーのーはたの

mf *f*

もとなたつ まちちゆ うせいと ぞい ぎーわれーら

- | | |
|----|---|
| 1. | 宇和の海原 ^{うなばら} 潮 ^{うしお} うつ |
| | 磯 ^{いそ} の香 ^か 高 ^{たか} き 学 ^{まな} びやに |
| | 久 ^く 遠 ^{とほ} の真 ^ま 理 ^り もとめつ |
| | 町 ^{まち} 中 ^{ちゆう} 生 ^{せい} 徒 ^と ぞ いざわれら |
| 2. | 若 ^{わか} 者 ^{もの} 叫 ^{こゑ} ぶ 青 ^{あお} 空 ^{ぞら} に |
| | ちぎ ^{ちぎ} りも固 ^{かた} く 師 ^し と友 ^{とも} に |
| | 至 ^し 善 ^{ぜん} の道 ^{みち} を 開 ^{ひら} きつ |
| | 正 ^{せい} 義 ^ぎ の旗 ^{はた} の もとにたつ |
| | 町 ^{まち} 中 ^{ちゆう} 生 ^{せい} 徒 ^と ぞ いざわれら |
| 3. | 伊 ^い 方 ^{はた} の峯 ^ね の 映 ^{うつ} る日 ^ひ に |
| | 垂 ^た 乳 ^{にゅう} 根 ^{こん} しのぶ ふるさとを |
| | 慕 ^も い集 ^あ いて きよ ^{きよ} うもまた |
| | 緋 ^ひ 林 ^{りん} の旗 ^{はた} の もとにたつ |
| | 町 ^{まち} 中 ^{ちゆう} 生 ^{せい} 徒 ^と ぞ いざわれら |

伴奏パート：町見郷土館所蔵楽譜より



町見郷土館所蔵